

令和5年度用高等学校教科書「化学／化学706」訂正のお願い

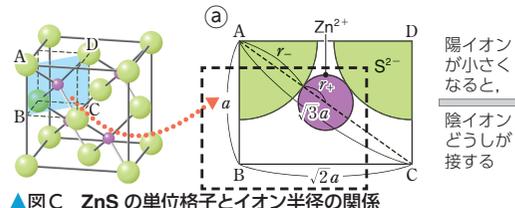
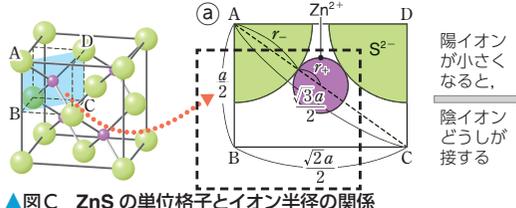
常日頃は弊社書籍をお使いいただき、厚く御礼申し上げます。

さて、現在ご指導いただいております標記教科書におきまして、下記の訂正を行いました。

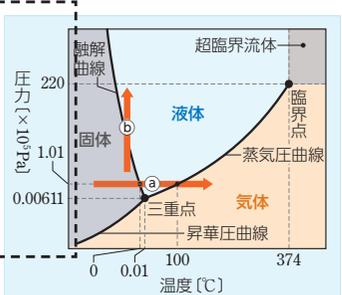
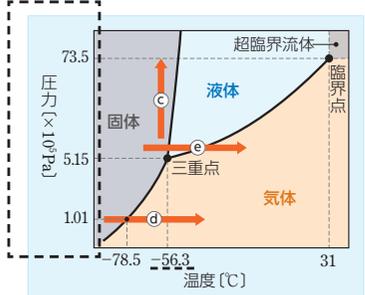
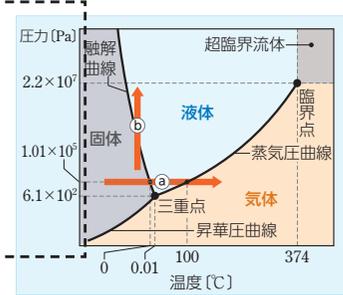
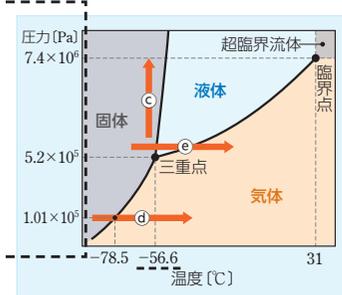
誠に恐れ入りますが、この訂正に関しまして、生徒の皆様にご周知いただきますようお願い申し上げます。

なお、訂正の内容は弊社ウェブサイト内(<https://www.chart.co.jp/top/teisei/>)にも掲載いたします。また、この訂正内容は、令和6年度供給の教科書では修正済みでございます。

教科用図書検定規則に基づき訂正をお知らせするとともに、ご迷惑をおかけいたしますこと、書面をもちまして、深くお詫び申し上げます。

頁	行	原文	訂正文
17	3, 図C	<p>●硫化亜鉛 ZnS の結晶格子</p> <p>図C③の対角線ACについて、$AC = \sqrt{3}a = 2(r_+ + r_-)$ ③</p> <p>陽イオン●と陰イオン○および陰イオンどうしが接するときの構造を考える。 $BC : AC = \sqrt{2} : \sqrt{3}$ であるので、③式より、$2r_- : 2(r_+ + r_-) = \sqrt{2} : \sqrt{3}$ となり、 イオン半径の比は、$\frac{r_+}{r_-} = \frac{\sqrt{6}-2}{2} \doteq 0.225$ になる。</p> <p>NaClと同様に、これよりイオン半径の比が小さくなると不安定になるので、 $\frac{r_+}{r_-} \geq 0.225$ であれば、配位数4のZnS型の構造をとることができる。</p>  <p>▲図C ZnSの単位格子とイオン半径の関係</p>	<p>●硫化亜鉛 ZnS の結晶格子</p> <p>図C③の対角線ACについて、$AC = \frac{\sqrt{3}a}{2} = 2(r_+ + r_-)$ ③</p> <p>陽イオン●と陰イオン○および陰イオンどうしが接するときの構造を考える。 $BC : AC = \sqrt{2} : \sqrt{3}$ であるので、③式より、$2r_- : 2(r_+ + r_-) = \sqrt{2} : \sqrt{3}$ となり、 イオン半径の比は、$\frac{r_+}{r_-} = \frac{\sqrt{6}-2}{2} \doteq 0.225$ になる。</p> <p>NaClと同様に、これよりイオン半径の比が小さくなると不安定になるので、 $\frac{r_+}{r_-} \geq 0.225$ であれば、配位数4のZnS型の構造をとることができる。</p>  <p>▲図C ZnSの単位格子とイオン半径の関係</p>

(裏面に続きます)

頁	行	原文	訂正文
35	12 13	 <p>▲図12 水の状態図 変化①…大気圧(1.013×10⁵Pa)のもとで水を加熱していくと、0℃で融解が起こり、100℃で沸騰が起こることがわかる。 変化②…水は融解曲線(固体と液体を分ける曲線)の傾きが負であるので、氷を加圧していくと、液体に変化することがわかる。このような性質は水の特徴である。</p>  <p>▲図13 二酸化炭素の状態図 変化③…多くの物質では、二酸化炭素のように、融解曲線の傾きが正であり、固体を加圧しても、液体になることはない。 変化④,⑤…二酸化炭素は、大気圧のもとで固体を加熱していくと、-78.5℃で固体から気体へ変化(昇華)する。しかし、5.15×10⁶Paより高い圧力のもとで固体を加熱していくと、固体から液体を</p>	 <p>▲図12 水の状態図 変化①…大気圧(1.013×10⁵Pa)のもとで水を加熱していくと、0℃で融解が起こり、100℃で沸騰が起こることがわかる。 変化②…水は融解曲線(固体と液体を分ける曲線)の傾きが負であるので、氷を加圧していくと、液体に変化することがわかる。このような性質は水の特徴である。</p>  <p>▲図13 二酸化炭素の状態図 変化③…多くの物質では、二酸化炭素のように、融解曲線の傾きが正であり、固体を加圧しても、液体になることはない。 変化④,⑤…二酸化炭素は、大気圧のもとで固体を加熱していくと、-78.5℃で固体から気体へ変化(昇華)する。しかし、5.2×10⁶Paより高い圧力のもとで固体を加熱していくと、固体から液体を</p>
180	脚注 1	<p>① (44)式の右向き反応がCH₃COOHの酸としてのはたらき(電離)であり、左向き反応がCH₃COO⁻の塩基としてのはたらき(弱酸の遊離、塩の加水分解)である。したがって、緩衝液には、酸のはたらきをする物質と塩基のはたらきをする物質が共存しているといえる。</p>	<p>① (44)式の右向き反応がCH₃COOHの酸としてのはたらきであり、左向き反応がCH₃COO⁻の塩基としてのはたらきである。したがって、緩衝液には、酸のはたらきをする物質と塩基のはたらきをする物質が共存しているといえる。</p>